

小児看護学における「子育てカレッジ実習」に導入した 健康教育に関する教育効果

上山 和子¹⁾*・山本 裕子¹⁾・小田 慈¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部

(2018年11月21日受理)

小児看護学における「子育てカレッジ実習」に導入した健康教育に関する教育効果を明らかにし、今後の教育方法に活かすことを目的とする。研究方法は、質的帰納的研究である。レポート記録を分析した結果、【子どもへの伝え方の工夫】【保護者の協力を得た展開方法】【子どもと保護者の反応】【健康教育の準備の必要性】【体験型健康教育の効果】の5カテゴリー、12サブカテゴリー、126コードで構成されていた。

以上より、学生は、子育てカレッジ実習に導入した健康教育を振り返ることにより、子どもの成長発達過程における健康増進に向けた日々の取り組みを学修できていることが明らかになった。

(キーワード) 小児看護学実習、子育てカレッジ、健康教育、教育効果、コア・カリキュラム

はじめに

小児看護学の授業目的は、主に子どもの健康の維持・増進を学ぶ小児看護学概論、健康問題をもつ子どもの看護を学ぶ小児看護学援助論、様々な健康レベルに応じた看護について学ぶ小児看護学実習に大別される。さらに小児看護学実習では、健康な子どもと健康障害をもつ子どもの看護を学修することを目標に実習を展開している。

先行研究では、3～4年次の小児看護学実習に導入した子育てカレッジ実習の教育評価を分析した。その結果、子ども及び保護者との関わりをとおして、子どもの成長発達過程について学ぶ機会となっていた¹⁾。子育てカレッジは、地域の子育て支援の一つとして行政と大学との協働で運営されている²⁾。そこで、子どもとの触れ合いを通して成長発達過程における子どもの健康を維持・増進させる啓発活動としての健康教育を小児看護学実習に取り入れたと考えた。

看護基礎教育課程における小児看護学実習の実習形態の動向として多くの教育課程では、保育園実習と病院実習が取り入れられている³⁾。A大学では、保育園実習から子育てカレッジ実習に変更した背景として、看護学実習における保育園での実習場所の確保困難がある。また、学内に子育て支援の施設が設置されることにより、保護者への支援について直接的に学修する場として利用しやすくなったことなどにより実習を移行した経緯がある。

さらに幼児教育課程を専門に学ぶ学生に比べ、看護基礎教育課程の保育園実習では短期間の実習であり、啓発活動などを取り入れた自主的な活動を実習項目として取り入

れることは難しい現状がある。

一方、今後の学士課程におけるコア・カリキュラムの小児看護学実習の方針として多様な場における成長発達過程の支援を学ぶ機会を掲げている⁴⁾。

このことから、小児看護学実習における保育園実習を従来の保育園だけでなく地域の子育て支援の施設を活用することは多様な場で学ぶことに繋がり、今後の小児看護学実習の一つのあり方として地域の子どもの健康の維持増進に関与する実習形態と考える。

本研究では、小児看護学における「子育てカレッジ実習」に導入した健康教育に関する教育効果を明らかにし、今後の教育方法に活かすことを目的とする。

1. 研究方法

- 1) 研究デザイン：質的帰納的研究
- 2) 対象：2016年から2017年にA大学看護学科の小児看護学実習を履修した学生の「子育てカレッジ実習」のレポート記録で本調査に同意が得られた38名分。
- 3) 調査時期：2018年2月
- 4) 調査方法および分析方法：「子育てカレッジ実習」のレポート記録を内容分析する。分析の過程では信用性・確証性を高めるため、研究者間で繰り返し検討した。
- 5) 倫理的配慮：A大学小児看護学実習修了後に本研究に関する説明書を配布する。説明の文書には、研究目的、内容分析によるデータ処理、匿名性が完全に確保されていること、成績評価は終了し成績には関与しないこと、参加は自由意思で拒否による不利益は全くないこと、同意

*連絡先：上山和子 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

が得られない場合は、データから外すこと、成果について公表することを口頭および文書で説明した。新見公立大学倫理審査委員会の審査を受けた（承認番号150）。

2. A大学小児看護学の子育てカレッジ実習の概要⁵⁾

A大学小児看護学の子育てカレッジ実習では、健康な子どもの発達段階の理解と子育て支援の理解を目的としている。子育てカレッジ実習の一環に健康教育を導入し、子育てカレッジに来所している子ども及び保護者を対象に季節の健康課題を踏まえながら体験型の健康教育を実施している。

健康教育の内容としては、成長発達過程に関連した運動や食生活、感染予防や季節に関連したテーマなどを挙げている。このテーマは予め、学生側が一方的に決めたテーマを示すのではなく、子育てカレッジ実習1日目に子どもや保護者との触れ合いを通して、保護者のニーズを踏まえてテーマの決定を行っている。実習2日目の午前には健康教育の実施、午後には子育てカレッジの指導者からのコメントをもらい、健康教育の振り返りを行っている（図1）。

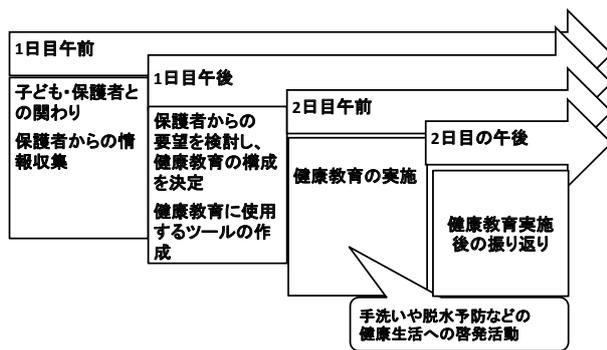


図1. 健康教育の流れ

以下に健康教育の内容を示す（表1）。

表1. 健康教育の内容

回	名称	内容
1	みんなでピョーン	子ども・保護者も含めてみんなでジャンプする
2	便秘の予防	食物繊維が含まれている食べ物を知る
3	食べたらゴシゴシできるかな	歯磨きの大切さを理解する
4	お手て ごしごしばいきん バリア	手洗いの重要性が分かる
5	生活リズムを作ろう	睡眠・食事・遊びが満たされる
6	なんでも食べよう	偏食による栄養の偏りを防ぐ
7	山に遊びに行くときの虫予防	お母さんが虫刺されの対処法が分かる
8	ギラギラ太陽に負けないぞ	日焼けによる皮膚トラブルを予防する

3. 結果

レポート記録を分析した結果、【子どもへの伝え方の工夫】【保護者の協力を得た展開方法】【子どもと保護者の反応】【健康教育の準備の必要性】【体験型健康教育の効果】の5カテゴリー、12サブカテゴリー、126コードで構成されていた（表2-1、2-2）。

以下、【 】はカテゴリー、「 」サブカテゴリー、< >はコードを示す。

1) 子どもへの伝え方の工夫

子どもへの伝え方の工夫では、「子ども・保護者に啓発活動の開始をお知らせするための工夫」ではく始めるタイミングとして2・3人の子どもたちが集まってきたその場で、小さく手遊びなどをして、他の子どもたちが興味を集まったところで始める>などが挙げられた。

「子どもの目線を意識した演出の工夫」では、<子どもの目線が動いてる人形や虫の方に動いていたので、場面ごと登場するものだけを動かすことが大切だと分かった>などが挙げられた。

「子どもの興味をもつ動物を活用した取り組み」では、<手洗いの啓発活動に動物を用いて行うことで興味を持ってくれた>などが挙げられた。

「擬音語を用いた子どもに分かりやすい表現方法」では、<啓発活動では効果音の時に声を出して強調するようにした>などが挙げられた。

2) 保護者の協力を得た展開方法

保護者の協力を得た展開方法では、「保護者の協力を活用した子どもへの伝え方」では、<こちらの投げかけに反応できるよう、保護者が子どもに声を掛けていて楽しく話を聞けるように手助けをしてくれた>などが挙げられた。

「保護者ともに行う啓発活動の効果」では、<子どもたちは親や保育士の方などの行動をよく見ており、それを真似するため、兄の親や親しい人にプリパレーションを手伝ってもらいと、より効果がある>などが挙げられた。

3) 子どもと保護者の反応

子どもと保護者の反応では、「子どもたちの反応に沿った啓発活動」では、<啓発活動では、子どもたちと目を合わせ反応を見ながらすることでより伝えることができた>などが挙げられた。

「体験型を取り入れた啓発活動時の子どもの反応」では、<子どもが実際に参加してできるようにしたので、子どもたちも興味をもってくれた>などが挙げられた。

4) 健康教育の準備の必要性

健康教育の準備の必要性では、「啓発活動前の子どもと

表 2-1. 子育てカレッジ実習の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
子どもへの伝え方の工夫	子ども・保護者に啓発活動の開始をお知らせするための工夫	・始めるタイミングとして2・3人の子どもたちが集まってきたらその場で、小さく手遊びなどをして、他の子どもたちが興味を示し集まったところで始める。 ・皆が集まるを待っていたら集中力がきれるので色々な工夫をしなければならない。
	子どもの目線を意識した演出の工夫	・子どもたちの目線が動いている人形や虫の方に動いていたので、場面ごとに登場するものだけを動かすことが大切だと分かった。 ・間いかけや優しい表現を用いるように心がけ、児に笑顔見せたり、目線が高くなりすぎないようにすることで、児も楽しく分かりやすい活動になるようにした。
	子どもが興味をもつ動物を活用した取り組み	・時間の中で表情や服を替えたり、2つの動物を比較することでは、少し内容を理解してくれたと思う。 ・手洗いの啓発活動に動物を用いて行うことで児が興味を持ってくれた。
	擬音語を用いた子どもに分かりやすい表現方法	・啓発活動では効果音の時に声を出して強調するようにした。 ・興味をもってもらえるような楽しい、視覚的な訴えと歌などによる聴覚的な訴えといった様々な視点から考えていく必要性を学んだ。
母親の協力を得た展開方法	母親の協力を活用した子どもへの伝え方	・こちらの投げかけに反応できるよう、母親が子どもに声をかけていて楽しく話を聞けるように手助けをしてくれた。 ・集団指導の難しさとして、母親の協力が必須である。
	母親とともに行う啓発活動の効果	・啓発活動では親の協力があり、子どもたちが手洗いポーズをしてくれて成功だった。 ・子どもは親や保育士の方などの行動をよく見ており、それを真似するため、児の親や親しい人にプリパレーションを手伝ってもらうと、より効果がある。
子どもと保護者の反応	子ども達の反応に沿った啓発活動	・啓発活動では子どもたちと目を合わせ反応を見ながらすることでより伝えることができた。 ・意外と聞き耳をたてていた子どもは本当によく観察したり、聞いたりしていた。
	体験型を取り入れた啓発活動時の子ども反応	・緊張している雰囲気の際は主体的な参加を待つだけでなく、こちら側から歩み寄っていくことで子どももこころを開いてくれる。 ・子どもが実際に参加してできるようにしたので、子どもたちも興味をもってくれた。

表 2-2. 子育てカレッジ実習の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
健康教育の準備の必要性	啓発活動前の子どもの触れ合いによる効果	・啓発活動前に一緒に遊んでいたことは健康教育に効果がある。 ・啓発活動前に一緒に遊んでいたため、学生を認識して興味をもっていてくれたと思う。
	子どもの特性を考慮した啓発活動の展開内容	・子どもの集中力が短いので、テーマがはっきりして分かりやすく、家に帰っても実践できるように母親にも必要性や重要性を理解してもらえて簡単なものが良いとわかった。 ・啓発活動実施後、人形などに興味を示してくれていたため、大きめの人形や表情が変化するという工夫は効果的であった。
体験型健康教育の効果	啓発活動終了後の保護者間での意見交換	・終わった後に保護者間で便秘・食べ物の話をしていたことより、便秘に対する意識づけができたと思う。 ・テーマとして夏の時期に日焼けしやすいので、保護者の方々にも興味がある内容だった
	啓発活動後の保護者の子どもの健康に対する意識変化	・啓発活動を終えて保護者も理解しているか確認したり、日焼け対策やスキンケアはどのようになっているか聞いたりすると内容についての反省や保護者の正しい理解と個別指導につなげられた。 ・手洗いをして風邪にかかるのを予防することが大切で、そのような意識を啓発活動によって母親に示すことで自宅でも一緒に手洗いをしてくれる。

の触れ合いによる効果」では、＜啓発活動前に一緒に遊んでいたため、学生を認識して興味をもっていてくれたと思う＞などが挙げられた。

「子どもの特性を考慮した啓発活動の展開内容」では、＜啓発活動後、人形などに興味を示してくれていたため、大きめの人形や表情が変化するという工夫は効果的であった＞などが挙げられた。

5) 体験型健康教育の効果

体験型健康教育の効果では、「啓発活動終了後の保護者間での意見交換」では、＜終わった後に保護者間で便秘・食べ物の話をしていたことより、便秘に対する意識づけができたと思う＞などが挙げられた。

「啓発活動後の保護者の子どもの健康に対する意識変化」では、＜手洗いをして風邪にかかるのを予防することが大切で、そのような意識を啓発活動によって保護者に示すこ

とで自宅でも一緒に手洗いを行ってくれる＞などが挙げられた。

4. 考察

1) 子育てカレッジ実習における健康教育導入による教育効果

学生は、1日目の実習体験により保護者のニーズを把握し、その内容を踏まえて健康教育のテーマ、内容の構成を検討し、健康教育を実施することで、子ども・保護者の反応を捉え、具体的に学ぶ機会になったと考える。

また、健康教育で初めて子ども・保護者に接するのではなく、事前に接することで、子どもや保護者とのコミュニケーションを図ることに繋がり健康教育の効果が高まったといえよう。

子育てカレッジにおける健康教育は、テーマに沿った物

語に身近な例として色々な子どもが登場する体験型であり、自由に意見交換のできるところが特徴である。そのため、学生も保護者に協力してもらい、子どもが参加しやすい状況づくり、保護者自身もテーマ内容を確認できる場となっている。このことは、その後の健康教育終了後の保護者同士の会話にテーマの内容が取り上げられている場面を学生は見聞することがあり、実践内容を実感する機会となる。また、学生自身も健康教育後に保護者から直接質問されることにより、実施した意義を振り返ることができたと考える。

学生が健康教育のテーマとして取り上げた内容は、保護者の子どもの日常生活における健康問題を引き出し取り上げている。

健康教育では、一般的に感染予防としての手洗いなどが挙げられる。本研究においても感染予防の基本である手洗いがテーマとして挙げられ、実際に手洗いの演習を行った。これらは、体験型の健康教育として年少児の時期から取り入れることで、学齢期の健康管理にも繋がると思われる。

また、便秘は、子どもの健康問題として重症度は低い、どの子どもにも実際に起きる頻度は高い。便の性状は、子どもの健康状態を図るバロメータである。嘔気・嘔吐、食欲不振で小児科外来を受診するケースもあり、便の回数・性状に保護者が関心をもつことは、日常における健康管理として重要である。

四季の健康問題として、夏季では、熱中症などが挙げられる。子どもの脱水は、成人に比べて重症化しやすい。外遊び後にこのような健康教育を行うことは、体験後であり、さらに脱水について意識を高める機会になったといえる。加えて保護者は子どもの健康に対する知識を深化させる機会なるといえる。

以上の内容から、学生は子どもに起こりやすい健康問題を捉え、健康教育を行っていると考える。つまり、学生は、健康教育を実施する前に保護者のニーズを把握し、実施後に保護者同士の意見交換の場に立ち会うことで、健康教育の目的や意義を深める機会となり、教育効果が高まったといえる。

2) 健康教育と今後の教育方法への示唆

学生は、子育てカレッジ実習に導入した健康教育を振り返ることにより、子どもの成長発達過程における健康増進に向けた日々の取り組みを学修できたと考える。健康の維持増進に向けた取り組みとして、手洗いなど日々の生活習慣は健康の維持するための習慣化につながる。さらに子どもとともに体験する保護者にとっても子どもへの伝え方を学ぶ機会になり、家庭での活用につなげる機会になったと考える。

子どもの成長発達過程への支援は保護者を中心として

地域全体に広げていく必要がある⁶⁾。次世代育成支援対策支援法では、次代の社会を担う子どもが健やかに生まれ育成されることを定めている。さらに子育て世代包括支援センターの設置が義務化されるなど、子どもの健康支援に対する看護職の役割は大きい⁷⁾。小児看護に携わる看護師として保護者の子どもへの健康サポートを支援し、成長に寄り添っていくことが求められる。

今回の子育てカレッジ実習で展開している健康教育活動は、小児看護学実習の一つの展開方法として子育て世代への健康支援に寄与できると考える。学生が地域の子どもや保護者に直接関わる機会をととして小児期の健康づくりを体験する意義は高いと考える。

今後の課題として子育てカレッジで行う健康教育が保護者の子育て中の健康意識にどのような効果を及ぼすか検討していきたい。

謝辞

本研究にご協力をいただいたA大学看護学科の学生に感謝致します。

文献

- 1) 上山和子・山本裕子：子育てカレッジを活用した小児看護学実習の教育評価と課題，新見公立大学紀要，36，149-152，2015。
- 2) 三好年江・片山啓子：大学と地域が協働する子育て支援者研修の成果と課題－「にのみ子育てカレッジ」2013年度の取り組みより－，新見公立大学紀要，35，149-152，2014。
- 3) 宮谷恵、大見サキエ、宮城島恭子：教員からみた学士課程における小児看護学実習の現状，日本小児看護学会誌，22(2)，68-74，2013。
- 4) 文部科学省：看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～，http://www.mext.go.jp/b_menu/sbingi/cbousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm (2018.10.31)
- 5) 新見公立大学看護学部看護学科：看護学実習要項.110-118，2014。
- 6) 日本小児科学会・日本小児保健協会・日本小児科医学会・日本「小児科連絡協議会ワーキンググループ：子育て支援ハンドブック，144-170，2011。
- 7) 及川郁子：小児看護における育児支援.小児看護，41(2)，144-149，2018。

Effect of Learning through Health Education for Participants of a Parenting Support Program during Pediatric Nursing Training

Kazuko Ueyama, Yuko Yamamoto, Megumi Oda

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

To improve our teaching methods, we examined students' learning through health education for participants of a parenting support program called the Parenting College during pediatric nursing training. By qualitatively and inductively analyzing students' reports, we created 5 categories, consisting of 12 sub-categories and 126 codes: [improving the method to explain to children], [developing education with mothers' cooperation], [children's and their parents' responses], [the necessity of preparing for health education], and [effects of experience-based health education].

The results confirmed that the students had appropriately learned daily approaches to promote children's health during their growth period by reflecting on the details of health education they provided for participants of the parenting support program as part of pediatric nursing training.

Keywords: pediatric nursing training, Parenting College, health education, learning effects, core curriculum

